慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本歴史の著者通事ヨハン・ロドリゲス神父
Sub Title	
Author	Schurhammer, Georg(Schurhammer, Georg)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.3 (1940. 12) ,p.111(491)- 139(519)
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19401200-0111

日本歴史の著者通事ヨハン・ロドリゲス神父

ゲオルグ・シュールハンマー

緒言

第十六、七世紀は日本の歴史の中で最も興味あり、また最も重大な時期の一つである。而して此の時代の歴史の最も重要な史料として、當時日本に在留してゐた耶蘇會の教師達の書翰や報告や史的著述(ゲシヒツウエルケ)がある。教師達の多數の個人的な手紙と並んで、此の場合就中注目せられるのは、廣範圍にわたり且つ内容の豐富な公式の年報類である。年報には、一定のプランがあつて、先づ政治上の事件を錄し、次いで傳道上の事件、個々の地方(プロビンツ)や個々の駐在所(スタチオーネン)の事件を敍べるのを常としてゐた。

是等の書翰年報は目擊者の同時代の報告として特別の價値を有するものであるが、それと並んで、日本の教會の總括的な歴史が早くから書かれてゐたのである。即ち神父ルイス・フロイスが前後七年を費して著したかの詳細なる「日本史」がある、私は、リスボンにある十八世紀の本書の寫本で、一五四九

年から一五七八年までを敍述した本書の第一部を一九二六年に當時の駐日獨逸大使エー・アー・フォレッチ博士と共に公刊した。[1] フロイスは彼の大著を未だ完成し得ない中に一五九七年長崎で永眠した。それから四年の後、日本巡察使アレクサンデル・ヴリニャノはマカオに於いて、「日本に於ける耶蘇教の始原と發達第一卷」を著し、一五四九年から一五七〇年に至るまでの日本教會史を編年體に敍述した、その際彼は本問題に關し歐洲諸學者の文章を引用し、之を訂正增補する所があつた。[2] 又彼は是より先一五八三年に聖フランシスコ・ザビエルの事蹟を著書「東印度に於ける耶蘇會の起原と發達の歷史」の中で述べてゐた。[3]

フロイスもヴリニャノも完成することの出來なかつた仕事を、聖フランシスコ・ザビエルの同僚として第三番目に取上げたのが通事ヨハン・ロドリゲス神父である。彼の事蹟、彼の著述の計畫、その實現、その價値について、以下少しく說明を試みよう。

一、生涯[4]

ヨハン・ロドリゲスは一五六一年葡萄牙のラメゴ司教區（ビストウム）のセルナンセリェに生れ、一五七六年十六歲にして早くも日本に渡來した。二年後には豐後のドン・フランシスコ卽ち屋形大友義鎭に從つて日向への不幸な出征に同行し、一五八〇年の十二月に耶蘇會に入會した。彼は一五八八年まで府內（大分）に

在住し、同所の修道院で修業した。ラテン語と哲學を研究し、二年間文法を學び、一五八七年には助教（ミニスター）の職についた。健康に惠まれ且つ鋭い理解力を有してゐた若い修士（オルデンスマン）は、日本人の同僚と交はつてゐる中に、間もなく日本語に熟達し、一五八八年には既に日本語で説教することが出來る程になつた。彼は日本の文學や哲學を研究し、耶蘇教の偉大な保護者であつた大友義鎮には、同人が一五七八年に受洗する以前から知遇を得てゐた。一五八九年と一五九〇年には、この若い修學修士（ショラスティカー）は有馬の八良尾の學院（セミナール）でラテン語の教師をしてゐた。同地の屋形有馬晴信は一五七九年に受洗してドン・プロタジオと名のつた人である。豐後の屋形は受洗後四年にして、有馬、大村の二侯と共に四人の若い日本人貴公子、伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンを代表としてローマに派遣し、耶蘇教界の主長たる教皇に忠順の意を表せしめた。四使節が一五九〇年七月に歸朝し、巡察使ヴリニャニが彼等と共に秀吉の宮廷に對して記念すべき參府をなした時に、ロドリゲスは通譯として一行に加はつてゐた（一五九一年）。この若い修學修士は彼の任務に全く適任であることを證明したので、爾來日本教會の會計方（プロクラトル）として秀吉の京都の宮廷を屢々訪れることになり、また秀吉の方でも彼を通譯兼仲介者として頗る尊重する所があつた。さうして彼は同名のヨハン・ロドリゲス・ジラム（P. Johann Rodriguez Giram）[5]と區別するために通事ヨハン・ロドリゲスと呼ばれるに至つた。その後二年間、即ち一五九二、三年にロドリゲスは長崎の諸聖人（アレハイリゲンコレーグ）の學林で神學研究の課程を終了し、一五九四年にマカオで司祭職（プリースター）を許された。一五九六年に彼は長崎に歸來し、同所

で一五九七年二月五日に三人の日本人同輩を含む廿六人の基督教徒が新に勃發せる切支丹迫害の犧牲として十字架にかけられて死ぬのを目擊し、又一六〇一年の始めには四つの誓願（ファイエルリッヘン・プロフェスゲリュブデ）を獻て、耶蘇會と一層深く結ばれた。嘗てヴリニャニがなしたと同樣に副管區長ゴメスやパシオも亦彼を耶蘇會の會計方（プロクラートル）に登用した、日本語及び日本事情についての異常に豐富な知識、俗人的經驗、事務的熟達、秀吉、家康その他日本の諸大名との好關係が彼をして迫害の多難時代に於いて日本教會の會計方の職に適任ならしめたのであり、事實彼はこの職にあること一五九一年から一六二六年に及んだのである。彼が德川將軍の下に若干の勢力を有し得たのは、この邪推深い將軍が教會を寬恕してゐたことに負ふものであつたが、長崎奉行（シュタットハルター）はロドリゲスの勢力を妬み、之を排除せんと企てた。かくて一六一四年に新なる迫害の嵐が卷き起つた時に、通事ロドリゲスは十二人の同輩と共に日本を放逐され、マカオに行かねばならぬことになつたのである。

ロドリゲスは會計方（プロクラートル）の職にあつた時から既に學問的な勞作に從ふ餘暇を有つてゐた。彼の日本語大文典《Arte da Lingoa de Japam》は一六〇四年から一六〇八年の間に長崎の耶蘇會印刷所で刊行され、又彼の助勢した日葡大字書《Vocabulario da Lingoa de Japam》は一六〇三、四年に同じ所から刊行された。然るに今回の追放は思ひも寄らぬ閑日月を彼に與へ、彼の學問的研究に新刺戟を加へたといへる。卽ちロドリゲスはマカオ上陸後間もなく、南京に近い鎭江府（チン・キャン・フ）に赴き、支那の史籍に一二八七年同地にあつたと

傳へる耶蘇教團（ゲマインデ）の遺蹟を訪ね、また一六二〇年には自著日本語文典の摘要を《Arte breve da Lingoa Japoa》の表題で刊行し、さうして同年の會員名簿（オルデンスカタログ）には彼の名の下に「彼は日本の年代記を著述す」と記してある。之卽ち我々が本論文に於いて詳論すべき「日本教會史」を指すものである。一六二二年十月卅一日マカオ發耶蘇會總長宛書翰の中で通事は此の書について次の如く述べてゐる。(6)

「第一回信長訪問以後ヴリニャニ神父の日本滯在中を通じ、私は總長アクヴィバの命によつて彼の會計方でありました。フランシスコ・パシオ神父が副管區長巡察使の任にあられた時には、又ペロ・ゴメス神父が副管區長であられた時にも、私はその職にありました。それ故當時から現在に至るまでに生じたさま〴〵の事件を私はよく知つて居ります。ペロ・ゴメス神父は實際有德な方であります、私は私が修學修士（ショラスティカー）として彼と共に豐後にゐた時、又神父として日本にあつた間に、彼についていろ〳〵の奇蹟を目擊致しました。私は當年五十九歳になりますが、なほ極めて頑健であります……私は天下の主によつて日本を追放せられて當地へ參りました……既に一昨年管區長が私に歸つて來るやうに命せられましたが、當地に於ける上長なる巡察使ジェロニモ・ロドリゲス神父が心配して私を出發させてくれませんでした。……私は猊下が私に日本へ行つて其處で死ぬことを御許し下さらんことを切願致します……私は今日教師諸兄の中で最も長い滯日の經驗者であります――四十五年間私は日本に居りました。私は日本語の詳細な文典を著しました、それは既に公刊せられてをります。又私は日本語文

典の初學者向の摘要をも著しました、之亦既に刊行されてをります。さうして巡察使ジェロニモ・ロドリゲス神父が、日本の神父達の勸誘によつて私に說かれた言葉に動かされて、「日本史」の第一部の執筆にとりかゝりました。といふのは、關白殿の迫害前後の日本の事情については、今日私は何人よりもよく熟知してをり、又その國の言語や歷史にも精通してゐるからです。又諸宗派のことについても、私は他の何人よりもよく知つてゐます。私は唯今までに仕事の大部分を仕上げました、卽ち國土習慣、並びにフランシスコ・ザビエル聖人の渡來よりコスメ・デ・トレス神父の逝去まで、つまり最初の二十年間の歷史を書上げました。この時代は最も重要で困難な時代であります。何故なら以後の時代は年報類によることが出來るからです……私の目指すところは文章でなくて、一に事實にあります――文章は他に人あつて之に苦心し、姓名をそれに書込むでせう……」

支那からローマへの通信には當時長時日を要した。四年の後に神父の次回の書翰がマカオから一六二六年十一月廿一日付で總長宛に送られた。その手紙の中で、彼は總長から彼の日本派遣を推薦してくれたことを感謝し、たゞ犯せる罪のために今なほ聖なる殉敎者の列に加はるの恩寵に浴し得ぬことを遺憾とする旨を告げてゐるが、右の外、通事が當時學問的な研究と論爭とに從事してゐたことも亦この手紙によつて知られる。といふのは、文中彼は西安府で新に發見された耶蘇敎記念碑の銘文を論じ、當時論爭の的であつたデウスの譯字問題につきてリッチ神父に對する反證として之を引用してゐるからであ

る。

翌年卽ち一六二七年十一月三十日付で[8]マカオから彼の一書翰が、當時ローマ在留葡萄牙駐在員の助手をしてゐたヌーノ・マスカレーニャス神父に宛てゝ出されてゐる。この手紙は、長期にわたる追放が彼にとつて日本への鄕愁をいやが上にもそゝりたてた次第をよく物語つてゐる。彼は次のやうに書いてゐる、

「日本人の一殉敎者は刑場への途すがらに次のやうな日本の二行詩を詠じた、

神の聖法を如何に汝が憎まうと、如何に汝が迫害しようとも、

間もなく夜は明け、朝となり、月が現はれるだらう、汝も之を妨げることは出來ない。

我々は之を一つの豫言だと思ひます。今まで四十年にわたる迫害の後に、事態は又再び良くなるでありませう……

私が當地方へ參つたのはフランシスコ・ザビエル神父の歿後廿三年を經た時でありました、當時彼の死と彼の記憶とはなほ新しく、傳道の方法は彼が遺し敎へたそつくりそのまゝでありました……ザビエルの精神が未だ生殘つてゐた時代には、外人であるとか葡萄牙人であるとかいふことは問題でなく、萬人ひとしく同一の母の正統の子供でありました……當時人々はなほ使徒的仕事に適するやうに敎育されました……言語も學習されました……然るに今日は迫害の時代であるに拘らず、言語さへ學ばずに入國し、御役に立つよりも寧ろ損失を大ならしめて居ります……

私は嘗て支那の修道院長（シュペリオール）のために諸宗派について廣汎な論文を一つ書きました……私は貴師に當地の事物、敬神、宗教についての拙著を御送り申上げます……西安府の石碑の解說はローマへ御送りします、より詳細なことは次の機會に申述べます……私は既に幾度か私が數年前から當地方の地理書を執筆してゐることをローマへ報告しておきました。當地の識者諸氏は、この仕事を極めて興味あり、且つ信用が出來、さうして歐洲の人々の知り得ぬ所だと言つてくれます。總長からも同書を是非一見したいと仰せられましたから、未知の諸國諸地方の種々多數の地圖と共に御送付致しませう。ヴェンツェスラス・パンタレオン[9]神父は之をラテン語に飜譯してやらうと申出でられ、既に序說と數章とを完成し、之を總長に捧呈しましたが、その後師は逝去されました。此の著作は二乃至三卷より成り、その中の一卷は《テアトルム・オルビス》の例に倣つて全卷を支那について費してをります。[10]

新任巡察使猊下は此の事について知つて居られるにも拘はらず、未だ一語も發せられない。私がベイラ生れの山猿で、美しく談話したり、巧に說明することも出來ないので、それについて大した印象を受けられなかつたもののやうです。その中に紙魚や火災が全部を、さうして私自身をも滅却して了ふでせう。神樣も一度はさうなることを望み給ふでせう。

之と同樣のことが「日本教會史」少くもその創始以來四十年間の歷史について言へます。此の本の第一部と第二部とを私は大略完成しました。日本教會の歷史について目擊者として眞の知識を有する

人々は死に絶えて了ひました。巡察使猊下は嘗て私に先を急ぐやうにと命ぜられた。然し私は老年です。私は文章を得意としないので、猊下は私がそれを別人に纏めて貰ふやうに希望されてゐます。然し私には一書記による援助もなければ、又その書記を雇ふに必要な金もない。然し、少くとも一番大切な史實を確立する點については私ほど細心な人間は斷じてありません。然し私が死んで了へば萬事はおしまひです。さうしたら歐洲にあつて此等の地方や日本について執筆したやうな人々がやつて來るでせう。――天使が降つて彼等の書物から虚偽の箇條を削除するとしたら、幾年もにわたり、白紙の箇條が澤山に出來ることでありませう」

それから七年後にもロドリゲス神父は、なほ日本教會史に從事してゐた、該書の標題の日付と序言が之を示してゐる。その時死が疲勞を知らぬ彼の手からペンを奪取つた。初めはさしたることと思はれなかつた脱腸(ブルツツ)が次第に悪化して俄かに死へと導いたのである。一六三四年三月廿日巡察使は會長に宛てゝ神父の訃報を傳達せねばならなかつた。(11)

二、「日本教會史」のプラン

日本教會史には二種の寫本が現存する。第一種はマドリッドの史學アカデミーの文庫に藏せられてゐる (Jesuitas, legajo 21, paquete 6)。之は二冊本で、その各冊は形態、筆蹟に於いて異つてゐる。第一

冊は 38×32 糎の大きさで薄い日本紙に書かれてゐる。枚數は十七葉であるが丁付はない。標題、プラン、序言及びアジア誌（ベシユライブンク・フオン・アシア）の未完の草案がその內容である。此のアジア誌は第一部の前につく筈であつたのである。第二冊は 37.5×35.5 糎の大きさで黃褐色の厚い日本紙に書かれ、丁付のある九十六枚から成り、最後の九丁と中頃の數丁は空白である。第二部の初めの廿八章を收載してゐるが、それはロドリゲス神父が死去に際して殘して行つたまゝの未定稿である。

第二種はリスボンのアジュダ圖書館所藏（49-4-53 fol. 2-236v）で、《Jesuitas na Asia》なる集成（ザンムルンク）中にある。此の集成は十八世紀前半にマカオに在つた耶蘇會日本管區の文庫でリスボンの傳道團（ミツシヨンスブロクール）のために作成された寫本である。此の寫本は第一部の第一、二卷（fol. 2-181）並びに第二部の第一章から第十八章までを含むでゐる。但し最後の章は中途までしかない。

以上兩種の寫本により我々は本書全體のプランを想見することが出來る。此のプランは既にマドリッド本の標題からも知られるところである。

「日本敎會史。書中取扱ふ所は、耶蘇會より遣されたるフランシスコ・ザビエル聖人が聖敎を此の國に說き始めたる次第、並に彼の後を繼いだ同會の敎師等により一五四九年より一六三四年に至る八十五年間に於いて未信者が我が聖敎へ改宗することにつき、如何に我が主が助け給ふたかにある。三部に分れ、第一部は島々、政府（レギールンク）、祭儀（クルト）、及び彼等の信ずる異端敎について、第二部は一五四九年より一

六三四年に至る八十五年間の日本教會の起原と發達とについて、第三部は日本より周圍の諸國になせる傳道旅行及び前掲の八十五年間に納めたる收穫、又耶蘇教徒の問答示教や教育の仕方、それに用ゐられた諸手段、及びこの教會の原始教會との類似について述ぶ」

序文の終りのところでロドリゲスは彼の著書のプランを我々に示してゐる——

第一部　土地と住民

讀者への序言

序說　アジア誌、附地圖及び固有名詞、その正しい綴方と發音の說明

第一卷　日本島の位置(ラーゲ)(附地圖)、年代(アルター)、名稱、數、大小、諸州への區分、諸州の細分、山嶽、海洋、河川、氣候

第二卷　諸科學、自由學藝(フライエ・キユンステ)、工藝(ハントウエルケ)

第三卷　日本の王、王族、貴族、政府、法、政治的諸時期、統治形態(レギールンクフォルメン)

第四卷　原始哲學者の三派、此の國の祭儀全部及び宗教は之に包含せらる、日本にある他の諸派は之より出づ

第五卷　第一の流派、儒道又は儒教と呼ばれる、日本の神道は之より出づ

第六卷　この派の道德說、世界の三主要原理、卽ち天、地及びその部分である法と、靈力(ゲニーエン)の崇拜

第七卷　日本固有の宗派たる神道とその神々

第八卷　第二の流派、佛法、釋迦を創始者とす、その教說の肉體的と精神的との區分、或は哲學者教養人にとつては神祕的祕傳的な、民象にとつては道德的通俗的な教說への區分

第九卷　この派の諸佛、諸種の宗派、その坊主、その稱號等々

第十卷　第三の流派、道者又は道教と呼ばれる魔術的哲學者達

第二部　教會史

第一卷	一五四九年——一五五二年	上長	フランシスコ・ザビエル
第二卷	一五五二年——一五七〇年	上長	コスメ・デ・トレス
第三卷	一五七〇年——一五八一年	上長	フランシスコ・カブラル
第四卷	一五八一年——一五九〇年	副管區長	ガスパル・コエリヨ
第五卷	一五九〇年——一六〇〇年	副管區長	ペロ・ゴメス
第六卷	一六〇〇年——一六一三年	副管區長	フランシスコ・パシオ
第七卷	一六一三年——一六一九年	管區長	バレンチン・カルヴリヨ
第八卷	一六一九年——一六二二年	管區長	マテウス・デ・コウロス
第九卷	一六二二年——一六二六年	管區長	フランシスコ・パチェコ

第十卷　一六二六年――一六三四年　管區長　マテウス・デ・コウロス

第三部　近隣諸國

第一卷　支那傳道史

一五八二年――一六一九年　日本教會に屬す

一六一九年――一六二三年　日本教會より分離

一六二三年以後　日本管區下の副管區

第二卷　安南、東京及びその隣國暹羅、柬埔寨に於ける傳道史

第三卷　朝鮮國の改宗せる多數の人々について。其地への若干の傳道旅行、國人の改宗渇望、既に若干の朝鮮人が光輝ある殉教者として日本で死んだこと、その中に一人の耶蘇會の神弟（ブレデイガー・ブルーダー）があつたこと

第四卷　日本教會及び近隣地方の傳道が一五四九年より一六三四年までにおさめた大いなる收穫について。是等の教會の原始教會との類似、改宗の方法、フランシスコ・ザビエル聖人が其處に殘した精神について。

全體のプランは右の通りである。それの細目の見透しは、リスボン本の第一部第一、二卷の章別と、マドリッド本の第二部第一卷の章別とが之を與へてくれてゐる。以下にそれを示さう。

第一部　第一卷

第一章　アジア、就中支那の敍述
第二章　日本島概論
第三章　日本人の起原
第四章　日本に關する歐洲最初の知識と葡人の日本發見
第五章　日本の主なる島々各論
第六章　日本の州分（プロビンツエン）、國分（ライヒエ）、領地分（ヘルシヤフテン）、及び注意すべき若干の山脈、河川、海洋
第七章　氣候、土產、奇獸
第八章　日本及び支那の度量（マッセ）
第九章　日本の里程
第十章　日本人の氣質
第十一章　日本に於ける諸變革、諸報告の外見的矛盾の解決
第十二章　家屋建築
第十三章　都の敍述
第十四章　內裏の宮廷
第十五章　日本人の習慣儀式概論

第十六章　衣服、就中着物（キルモノ）、袴（ハカマ）、肩衣（カタギヌ）、胴服（ドーブク）
第十七章　訪問、新年
第十八章　年始廻（ノイヤールスベズーフ）の儀禮（ツエレモニエン）
第十九章　他の式日（フエステン）の訪問
第廿章　その他の訪問
第廿一章　贈物、支那日本に於けるその捧呈
第廿二章　支那人の挨拶儀禮（ヘーフリヒカイツ・ツエレモニエル）
第廿三章　日本人の挨拶儀禮
第廿四章　徒歩又は馬上で道路で出會つた際の挨拶儀禮
第廿五章　來客（ガスト）の接待饗應
第廿六章　盃と肴（サカナ）一般
第廿七章　（貴賤間に於ける）肴（サカナ）の獻納（ダールライヒエン）と下賜
第廿八章　盃
第廿九章　饗宴、就中支那に於ける。
第卅章　饗宴、特に日本に於ける、その様式

第卅一章　饗宴の際の接待
第卅二章　茶の支度
第卅三章　過去と現在の茶の湯、最新の形式としての數寄（スキ）とその師匠　Sukinoyosho
第卅四章　數寄屋に於ける茶の湯（テー・ツエレモニー）
第卅五章　數寄（スキ）屋（ツエレモニー）に於ける茶の湯の目的と效用

第二卷

第一章　日本に於ける自由學藝（フライエ・キュンステ）と工藝概論、及びその分類（アインタイルンク）
第二章　日本の若干の工藝、繪畫
第三章　その他の工藝、建築家、武具刀劍工、金工、漆工
第四章　日本の自由學藝、書道
第五章　日本の書法（ジルベンシュリフト）
第六章　紙、墨、その他の文房具
第七章　印刷術
第八章　日本及び支那の數學
第九章　支那と日本の天文學

第十章　天とその分度（アインタイルンク・イン・グラーデ）
第十一章　星座、赤道、黄道
第十二章　日月蝕
第十三章　星辰とその位置
第十四章　水陸の分布と高低測算（アインタイルンク・フオン・ラント・ウツサー　ヘーエン・ベレヒヌンク）
第十五章　日本人と支那人の時刻の分ち方
第十六章　占星術、迷信

第二部　第一卷

第一章　使徒聖トマスが福音を支那に傳へた次第、當時の基督教徒の子孫について現存する遺蹟。一六二五年に發見せられたる（西安府の）石碑の證明する所に從へば、此の遺蹟は刺桐（Zait od Zaitam）の基督教のものである。

第二章　支那に現存する所謂（十字架の御法の教徒？）クリステン・デス・ゲゼッツェス・デス・クロイツェスの起源について

第三章　耶蘇會の神父等が渡來する以前、日本に既に神の掟についての知識ありしや

第四章　使徒聖トマスの後、フランシスコ・ザビエル聖人が此の東方の異教世界に於ける第二の使徒となつた次第

第五章　日本の異敎徒を改宗せしめるために神の攝理が選びたまへる諸手段について
第六章　ヤジローがマラッカに來り、フランシスコ聖人に會見し、信仰の祕密を學ぶためにポーロ學林に送られた次第
第七章　日本人ヤジローがフランシスコ・ザビエル聖人によつて信仰に導かれ、またゴアの司敎によつて洗禮を授けられ、聖なる信仰のパウロといへる名をえたる次第
第八章　フランシスコ聖人が日本に赴かんと決心した次第、並に惡魔が準備した諸妨害、また出發以前に聖人が整理した事について
第九章　フランシスコ聖人のゴアよりマラッカを經て日本に至る旅、及び途上の出來事について
第十章　フランシスコ聖人が聖なる福音の說敎を始めるために爲した諸準備について
第十一章　フランシスコ聖人が鹿兒島に於いて聖なる福音の說敎を開始した次第
第十二章　日本人の改宗を祝し、マラッカにて行はれた祝祭、及び日本到着後日本から發したフランシスコ聖人の書翰について
第十三章　坊主共が神父達に加へたる迫害について、フランシスコ聖人が鹿兒島から平戸に至る途中にて爲せる事について
第十四章　フランシスコ聖人が鹿兒島から平戸に行く際、途中に爲せる事について

第十五章　フランシスコ聖人平戸及び山口にて說教す
第十六章　聖人山口より都へ赴く、聖人が平戸へ歸るまでの途上の出來事
第十七章　フランシスコ聖人再び山口に赴き、印度總督及び司敎の書翰並びに進物を義隆に呈した次第及び義隆が神父に與へた家と布敎許可について
第十八章　フランシスコ聖人が山口に殘した收穫について、及び神が同地に於いて彼を通じて爲し給へる若干の奇蹟（ウンデルバーレンディングン）について
第十九章　彼が豐後に於いて葡人に歡迎された次第及び彼が同所の領主（ヘルツオーク）に對して行つた訪問について
第廿章　その間に山口に於いて起つた事件について
第廿一章　周防の領主義隆の殺された事、神父コスメ・デ・トレスと神弟ヨハン・フェルナンデスとが危險に陷つたこと
第廿二章　豐後の領主の弟が山口の領主に選ばれた事、及び聖人が印度へ向け出發した事
第廿三章　フランシスコ聖人支那の上川港（サンチエウ）を出發したこと、支那への旅行と同國王への遣使について討議したこと
第廿四章　聖人印度到着の後副王をして支那國王への使節を出さしめた次第、及び支那へ再航するまでに彼の爲した事

第廿五章　フランシスコ聖人マラッカに航し、同所で船長ドン・アルバロ・ダタイデが使節を妨害すること

第廿六章　上川島に於いて生じた事件及び支那入國のための神父の努力について

第廿七章　フランシスコ聖人の祝福せられたる歸天（ヒンガング）

第廿八章　彼が遺骸の不變なることにつき當局たる印度教皇代理（ゲネラル・ビカー）及び司教區監督（ビストウムスフエルワルター）の處置

三、「日本教會史」のプランの實現

ロドリゲス神父の此の大規模なプランは果してどれだけ實行せられたか。

日本の國土と住民を論ずべき總論的な第一部の中、第一卷と第二卷しか殘つてゐない。王、貴族、神道、佛教、道教を取扱つた殘り八卷をロドリゲスは書かなかつたやうに思はれる。リスボン本が之を暗示してゐる。一七四〇年代に、マカオの日本管區文庫の重要寫本を悉く複寫すべしとの命が下つた時に、當時既に第一部の始めの二卷と第二部の始めの十七章しか存しなかつたのである。それ故之を複寫した人は從前の卷別を變更し、第二部の十七章を第一部の第三卷としたのである。[12]

第二部についても、ロドリゲスは一五四九年から一五五二年までを取扱つた日本教會史第一卷だけしか完成することが出來なかつた。一五九七年に死んだルイス・フロイス神父の「日本史」が同じテーマ

を少くも一五八九年まで繼續してゐたから、此等の諸年の記事はそれ程緊要とは思はれなかつた。又「日本管區の教會史のための參考資料」（アパラト・フユール・デイ・キルヘンゲシヒテ・デス・ビストウムス・ヤーパン）と題するアジュダ文庫の寫本一卷（49—4—57）も同樣に十八世紀中葉に媽港から寫されたものだが、一五八八年から一五九三年までの歴史を含むでゐるし、又パジェスが入手した（H. Cordier, Bibliotheca Japonica 1912, 189—191 參照）同題の寫本二卷も一五八三年までの歴史を含むでゐるのである。[13]

それより以後一六〇〇年に至るまでの諸年については、既にロドリゲスの生前に、ルイス・デ・グスマン神父[14]が一六〇一年アルカラに於いて著した東印度、支那、日本に於ける耶蘇會傳道史が刊行せられてゐた。それより更に後の時代については、印行せられた各年報や殉教報告に取扱はれてをり、又總括的にはトリゴールト[15]や、クラッセ[16]や、シャルルボワ[17]などの歐洲で出た史書に取扱はれてをり、又一六〇〇年以後はパジェス[18]が之を取扱つてゐる。是等はロドリゲスが書かないで了つた諸卷を我々に補つてくれるものである。

ロドリゲスは遂に第三部には手をつけないで了つたやうである。が、他の人々がそれ〴〵獨立の著作の中でロドリゲスに代つてそれを果した。支那については、一六一〇年に大リッチ神父の逝去の際、彼の「支那に於ける耶蘇會と傳道の端緒についての註釋」が既に世に出てゐた、之は支那耶蘇會の歴史を一六〇九年まで述べたものである。[19] ロドリゲスの歿後十年にしてアントニオ・デ・ゴーベア神父は彼の劃

期的な著作「極東（アジア・エクストレマ）」を完成し、支那とその傳道史とを最も詳細に論じた。[20] 安南、東京、暹羅、柬蒲寨の傳道史は一六五〇年に至つてアー・エフ・カルディム神父によつて、その著「光輝ある日本管區に於ける耶蘇會の偉蹟」に敍述せられた。[21] 朝鮮に於いて敎會を設立維持することは當時未だ成功してゐなかつたが、秀吉が一五九一年に朝鮮に派遣した軍隊――大部分耶蘇敎徒より成る――の內に於ける傳道活動や日本に於ける朝鮮人信者の殉敎、就中一六二六年に長崎で殉敎した神弟（ブレディガー・ブルーダー）ヴイセンティウス・カウンのことは刊行された年報の中で既に取扱はれてゐた。最後に、最終卷でロドリゲスが根本主題としようとしたところのものも、既に一六〇一年にマカオで完成された。「日本に於ける耶蘇敎の始原と發達第一卷」でヴリニャノによつて取扱はれたのである（第十三章、原始敎會との類似、第十四、五章、恩寵、第十六章方法を見よ）。[22]

かくて大規模なプランの中の僅少な部分しか實現せられなかつたけれども、而も通事ロドリゲス神父の「日本敎會史」によつて我々に殘されたものは、十六世紀の日本文化史についての貴重な史料たるを失はない。之を明らかにするためには恐らく多言を要しないであらう。

四、ロドリゲス神父の「日本敎會史」の價値

ロドリゲスは「敎會史」の序言で彼の先輩について言及してゐる。「ルイス・フロイス神父は、日本に於

いて誰よりも餘計に書いた、日本の教會に彼以前及び彼の時代に生じた事件を苦心究明し、且つ數年繼續して年報を書いた……彼は一五六〇年から一五九七年まで廿七年間日本にあつて死んだ。さうして彼の時代の日本教會の始原と發達の歴史といふ形で、此の國民の慣習、政府、敬神（クルト）、宗教について書いた。然し彼は他に澤山の仕事を有つてゐたため、また一つには日本には内亂が頻々とあつたため、彼が自著を完結し、之に最後の筆を入れる前に、主は彼を召し給ふた。その上當時我が會の人々は日本の事物を今日程にはよく知つてゐなかつた。それ故、彼の著述の中にはもつと説明や研究の必要な點も若干あるのである。」

次にロドリゲスは歐羅巴の同僚トルセリヌス、マッフェイ、ルッェナ等に言及し、彼等は日本を親しく知らないから、彼等の書いたものには多くの誤があると述べ、更に日本の政治狀態の三つの異つた段階（ツーシテンデン）について述べて次の如く附言してゐる。

「此の第三の段階（德川時代初期を指す）に於いてヴリニャニ神父は我が會のメルクリアン總長及びアクワビバ總長の命によつて日本教會史の一部を書き、極めて多忙であつたにも拘らず……トレス神父の死に至るまでの部分を脱稿した。然し彼は日本語に通ぜず、且つ事態がしかく錯雜してゐる場合には必ずしも信憑し難い所の他人の報告に依存せねばならなかつたので、更に言へば、彼の著書はむしろマッフェイやトルセリヌスの書の註釋であるとも言ふべきで、この歴史はさして包括的でもなけれ

ば又明晰でもなく、多くの缺點がある。

今度私の書いた歴史の内容は興味深い上に有益でもあるだらう。といふのは、日本島の發見以來既に九十二年にもなるのに、一五四二年から一六三四年までの間に日本について書いた人は極めて少數で、而もその大部分は耶蘇會の人であつたからである……然し比律賓から來て日本に滯在した他の會派の敎師や俗人が、何か新しいことを書くといふこともあり得るのだから、玆に一言するのが適切であらう。卽ち、我々の祖國から遠く隔つた新しい國々の特質や慣習を正確に記述するためには、單にその國に一度行つたことがあるといふだけでは充分でない。それどころか彼は記述する國民や事物について長い經驗を有ち、且つ多くの研究と大いなる苦心とによつて、それについての眞實の知識を持たねばならない。何故ならば、若し是等が缺けてゐるならば、かゝる報告は甚だしい誤謬に陷入るからである……[23]

我々は今神の恩寵を以てこの歴史を全く信憑し得るものたらしめようと思ふので、我々が豫め深く調べ根本的に研究した事以外は、その中に一切書かないことに決めた。之が本書の今まで出なかつた根本の理由である。上長の委託によつて事實を確かめる者達はそれに必要な科學的知識を有してゐるのみでなく、その中の或者達はこの地に五十九年も安住してをり、フランシスコ・ザビエル聖人と日本に於いて交遊し且つ福音を日本にひろめた最初の人々の中の若干と交友關係にある。又或者達

は、四十年以上もこの地方に住み、言語に精通し、日本及び支那の科學、歴史、敬神によく通じ、彼の時代の大事件には親しく居合はせてゐるのである。さうして之等の事件については今日なほ目擊者が多く殘つてゐるから、嘘を云つても通用しないのである」

通事の歴史的批判が當つてゐるかどうかはフランシスコ・ザビエル聖人の生涯を敍した部分によつてよく知ることが出來る。卽ち第十九章で彼はフェルナン・メンデス・ピントに言及し、ピントがザビエルの豐後の大友宗麟の城中滯在の記事に對して、內外兩方の根據から此の冒險家の敍述が荒唐にして信用し難い所以を詳細に指摘してゐる。彼は進んで次の如く述べてゐる。「我々が此處で述べる所は確實である。何故なら我々は八年の間豐後に住み、同侯の受洗前後に親しく彼と交はり、彼の口からフランシスコ聖人と會つた時のことを度々聞いたのだからである。」

更に通事がどんなに根本的な研究をしたかといふことは、彼の日本人の起原についての極めて興味ある敍述が之を示してゐる。彼は日本、支那、朝鮮の史書を史料として引用しながら、批判的に之を選擇し、地方的遺蹟や傳承や言語文化上の類似によつて結論を出してゐる。彼は此處で五回の主なる移住があつたと認めてゐる。最初の移住者達は恐らく浙江から來たらしいが、本來の支那人ではなかつた。彼等は日向に落着き、その初め廿二代の支配者はそこの鵜戸岩門（ウドノワイト）の岩窟に住んだ。神武天皇に至つて玉座を大和に移した。支那の史書の論語（支那音はLumyü）や春秋、文化的類似、太古からの浙江との交通、

日向の民間傳承（オルト・リーフェルンク）などがその證據として引かれてゐる。第二回の移住は、通事の說によると、西紀前二二〇年に神武天皇から八代の後繼者の時代に行はれた、卽ち支那の一君侯（フュルスト）が始皇帝（チエン）の虐政を厭つて男女各一五〇〇人を率ゐて日本に亡命し、其處で二つの王國を立て、その名を秦王國（シンノコク）とよばれたといふのである。その次には漢朝の始祖の子孫達も日本に渡來した。最初の切支丹領主である天草のドン・ミゲルはその後裔で、彼は之を大いに誇とし、それについての或文書と祖先の系圖（リスト）とを有つてをり、今なほ支那にゐる親戚と書信を交換してゐる。又大內氏の祖先は朝鮮の百濟（タクサイ）國から移住して來たもので、義隆はその第七代目にあたるといふ。中國の南部一帶は、通事の說くところによれば、朝鮮に似た語法によつて朝鮮よりの出自を自ら暴露してゐるといふのである。更に韃靼人が奧州地方へ移住して來たことも恐らくあつたらう、といふのは、奧州は韃靼の島蝦夷（エゾ）と相對してゐるが、我が著者の說によれば、日本人は大陸の韃靼人と絕えず交易關係を有し、其處に若干の植民地を有つてさへゐたし、且つ彼が日本に來着した以後にも支那の絹織物がそこから輸入されてゐたからだといふのである。

通事の記してゐる詳しい都の町の敍述も仲々興味がある。その中で彼は至極懇意であつた市尹玄以法印の所でその町の水帳（ハウスリステン）に目を通したと言つてゐる。彼の日本についての詳細な敍述は同樣に興味深いものがある、彼はそのために就中太閤と內府（秀吉と家康）の檢地帳（ゲオグラフィッシエ・ランデスアウフナーメ）を利用し、又例へば儀式に關する章の史料としては就中殿中惣奉行伊勢守殿（オーベルホーフツエレモニエンマイスター）並びに小笠原殿の家傳（アムトリッヘ・ツエレモニエンブーフ）の書を利

用してゐる、此の兩家は代々將軍の劍道と馬術の師範役をつとめてゐたのである。

以上の數例を以てしても、通事ヨハン・ロドリゲスの「日本教會史」が十六世紀の日本を知るために如何に大きな價値を有つてゐるかは既に明らかであるだらう。十六世紀在日耶蘇會宣教師等の後世に殘した豐富な資料の印行と公開とが、近く實現せんことを！

一九三一年八月

註(1) *Die Geschichte Japans* (1549—1578) von P. Luis Frois S. J. Leipzig 1926.

(2) 十七世紀の寫本は大英博物館藏 (Additional Manuscripts 9857)、も一つの十八世紀の寫本はリスボンのアジュダ文庫藏 (49-4-53 f. 244-420)

(3) *Monumenta Xaveriana* Bd. I. Matriti 1900, 2-199 に印刷されてゐる。

(4) 通事の生涯のいろ〳〵の日時は耶蘇會日本管區の稿本名簿(ハントシユリフトリツヘン・カタログ)及び同會現藏の神父同僚の書翰原本によつて記した。

(5) 從來の著者達は誰もかれも神父ヨハン・ロドリゲス・ジラムとヨハン・ロドリゲス・ツーヅの二神父を同一人物と見て來た。ゾムメルフォーゲル、コルディエ、パジェス皆然りである。然し、ロドリゲス・ジラム神父は一五五八年にリスボン司教管區のアルコシェテに生れ、一五七六年葡萄牙で耶蘇會に入り、一五八三年印度に渡り、同地のパウロ學林で一年以上神學を研究し、一五八六年に日本に來た。日本で間もなく日本語に巧みになり、長く九州の府内(一五八七—八八年)、大村例へば郡(クリ)(一五八九年以後)に、又有馬の西郷の新傳道所(ノイグリユンドウング)所在地に活動し、一六〇〇年の終りに至つて都の上京の新な位置に呼迎へられた。一六〇三年以後一六一四年に迫害が彼を嬀港に追放するまで、我々は彼が祕書として長崎の副管區長のそばにゐるのを見る。嬀港で彼は一六二七年まで名簿にその名を錄せられてゐる。一六〇四—一三年、一六一八、一六二〇—二一年、一六二三年、一六二五年、一六二六年の各年の年報は彼の手に成るものである。

(6) 耶蘇會所藏、Japs. 18, 7.

(7) Japs. 18, 66.

(8) Japs. 18, 86.

(9) ヴェー・パンタレオン・キルウィツエル神父は一六二二年から一六二六年まで媽港に在り、一六二六年に死んだ。

(10) アー・オルテリウスの《Theatrum orbis terrarum》（アントワープ一五七〇年刊）を指す。此の書の一本を日本の切支丹公子一行が一五九〇年に日本に將來した。

(11) Japs. 18, 145.

(12) クリストヴン・アイレスは彼の名著「フェルナン・メンデス・ピントーと日本」（リスボン一九〇六年刊）に於て、各章の標題（85—91）及び第一部第三—六章の本文（123—155）を載せてゐるが、誤謬が多いやうである。エル・イョツト・エム・クロ神父は此の著者を單に媽港の年代記作者と呼んではゐるが、一九〇〇年にパリで刊行した著書「フランシスコ・ザビエル、その生涯と書翰」《Saint François Xavier, Sa vie et ses Lettres》の第二卷に第二部第六章と第十一—十八章の拔萃とを佛譯して載せてゐる。

(13) ツールーズ、グランド・アレーのポウル・サラダ氏現藏

(14) Historia de las misiones que han hecho los religiosos de la Compañia de Iesús para predicar el sancto Evangelio en la India Oriental, y en los Reynos de la China y Japón. Alcara 1601. 一八九一年にビルバオで新版が刊行された。

(15) De Christianis apud Iaponios Triumphis sive de gravissima ibidem contra Christi fidem persecutione exorta anno MDCXII usque ad annum MDCXX. Monachii 1623.

(16) Histoire de l'ègliſe du Japon. Paris 1689. 諸國語に飜譯せる、日本譯もあり

(17) Histoire et Description générale du Japon. Paris 1736.

(18) Histoire de la Religion Chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651. Paris 1869—1870. 2Bdc.

(19) 原本は耶蘇會に所藏されてゐるが、ペー・タッキ・ベントゥリ神父の Opere Storiche del P. Matheo Ricci S. J. Macerata 1911. Bd. I に載せられてゐる

(20) 此の廣汎にして且つ重要なる著作の原本は今耶蘇會に藏せられてゐる。十八世紀に媽港の原本から寫された一寫本がリスボンのアジュダ文庫にある (49-5-1 und 1)

(21) 葡萄牙語原本は一八九四年にリスボンでエル・コルディロ氏によつて復刻された (Batalhas da Companhia de Jesus na sua gloriosa Provincia do Japão)

(22) 註(2)を見よ

(23) 通事が此處でとりわけ念頭においてゐるのは、一六一五年に長崎で完成された商人ベルナルディノ・デ・アビラ・ヒロンの西班牙語で書いた「日本國報告」であるらしい。此の書は(西班牙)パストラナのフランシスコ會文庫に一本を、又エスコリアルに他の一本を(O. III. 19)、更に一本をマドリッドの國民文庫(Ms. 19628)に藏する。又耶蘇會日本宣教師ペドロ・モレホンが多數の評註をつけて訂正した一本を耶蘇會が藏してゐる(Jap. Sin. 49 f. 142—221 及び 58 f. 167—273)。なほ之については拙稿「フランシスコ・ザビエル時代(一五五一年)の京都の都市相」アントロポス、第十四—五號(一九二二年)八三一頁參照

(本稿は、Archivum Historicum Societatis Jesu. 第一卷、一九三二年、所收 Georg Schurhammer S. J. P. Johann Rodriguez Tçuzzu als Geschichtschreiber Japans の飜譯である。なほ譯文に傍點を附したのは、原文にイタリツクに組める部分である。

幸田成友、渡邊基譯)